新大山大聖寺（大相模の不動尊）

大聖寺の石碑

昭和５９年頃作成

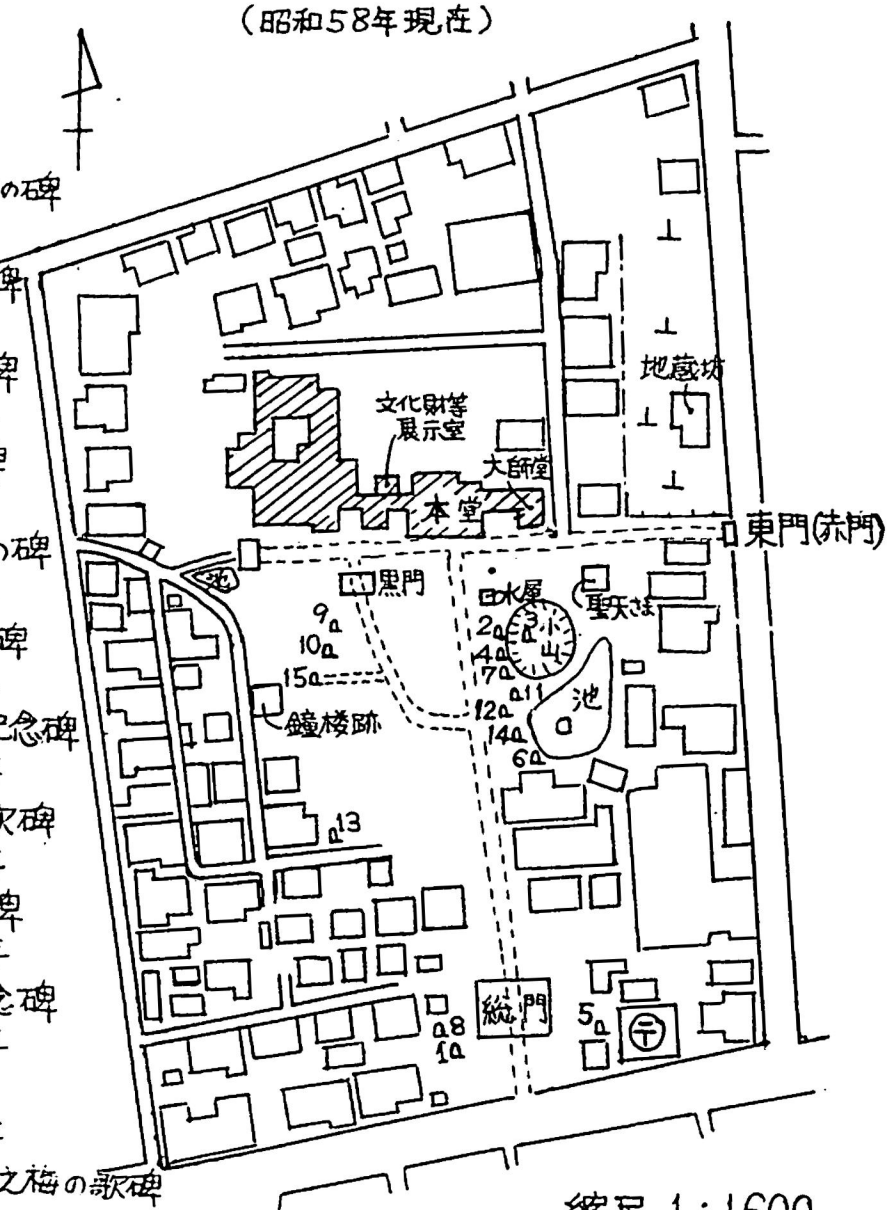
平成２１年１月再版

ＮＰＯ法人・越谷市郷土研究会　加藤幸一

大聖寺境内内の石碑の分布図

（昭和58年現在）

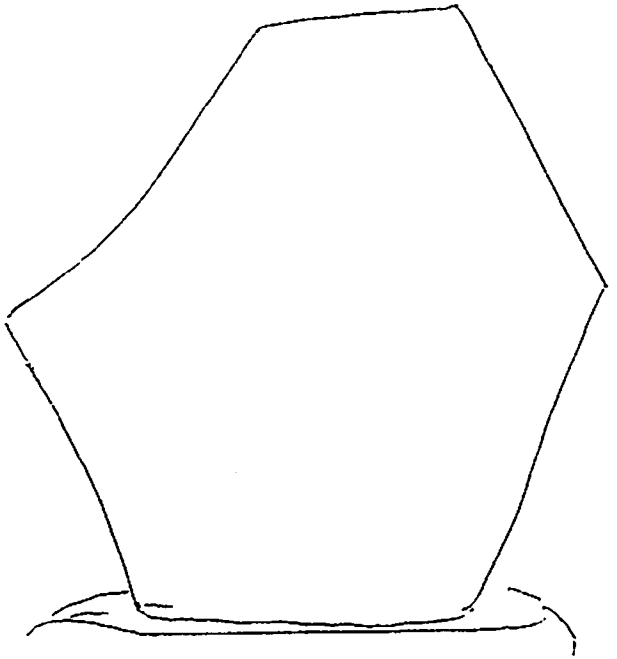
1 良弁塚
　天保8年
2 御手本講中の碑
　嘉永3年
3 有道軒先生の碑
　万延元年
4 斉藤先生の碑
　明治16年
5 惣門修繕碑
　明治21年
6 護摩木山講の碑
　明治26年
7 互任連の句碑
　明治30年
8 征清軍凱戦記念碑
　明治34年
9 御座の松の歌碑
　明治36年
10 御座の松の碑
　明治37年
11 日露戦役記念碑
　明治39年
12 降魔松
　明治40年
13 日露戦役記念之梅の歌碑
　明治42年
14 誠忠碑
　昭和42年
15 鶏魂碑
　昭和58年



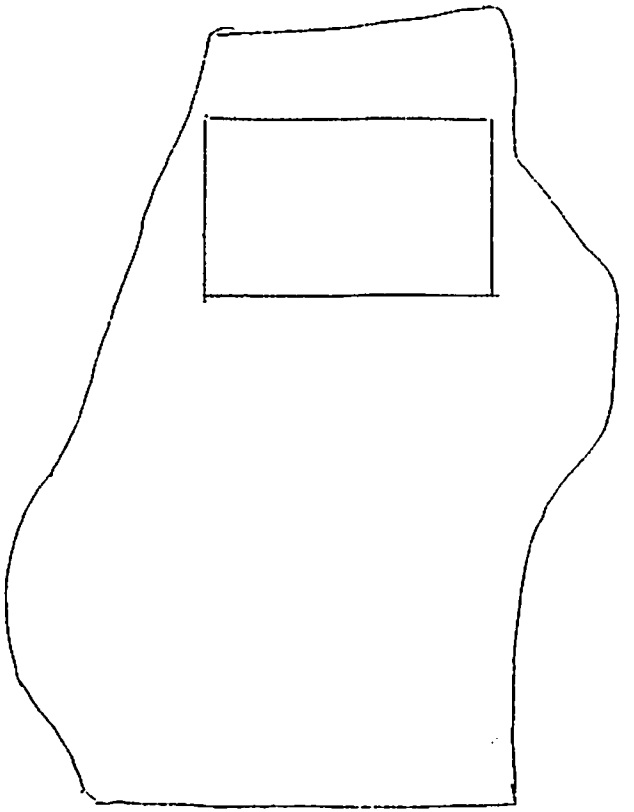
縮尺 1：1600

（ゼンリンの住宅地図より）

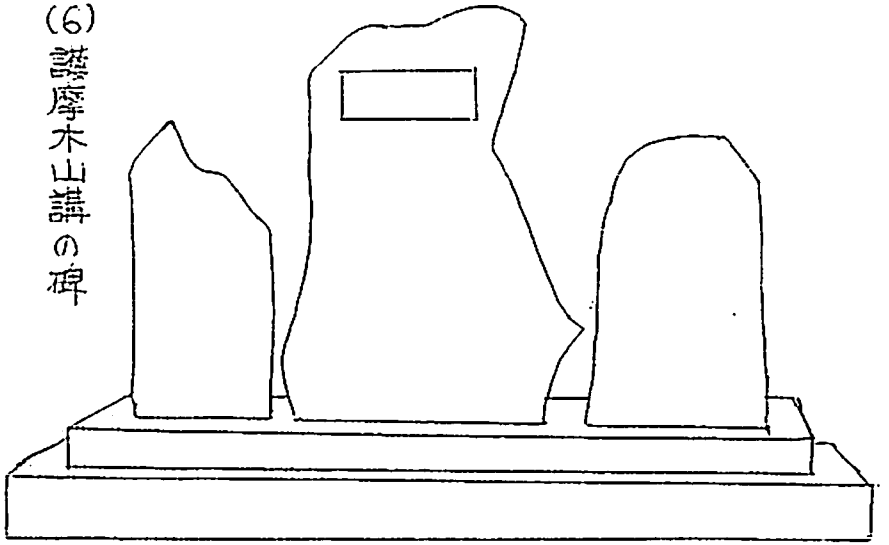
石碑の形（一部）



(2) 御手本講中の碑



(4) 斉藤先生の碑



(6) 諸摩木山講の碑

（1）『良弁塚』の碑

1．所在地　越谷市　西方　大聖寺境内

現在は惣門の南西にある。もとは県道を渡って大相模中学校に通じる道の西側の林家の敷地内（惣門の南方約六〇㍍地点）にあった。戦後になって現在地に移転した。

2．大きさ　高さ三二〇㌢　幅一五二㌢　厚さ一六㌢

3．表　面　良辨塚　一百二十一祐尊上人筆

4．裏　面

良辨大僧都者　相州鎌倉の住　藤原姓　染屋
太郎太夫時忠の姪也　寿山おとへらを　佛
道化縁の為ホそ　聖賢　再来もありなむ
僧都　幼けホくして　鷲乃翼に乗せられ　南
都東大寺の山中　飛入しそ　成長の後
遍歴行脚ち路次　此所ヲ笈をおろし　休息
せらきし丹　不思義に　笈おもくして　挙ら
されは　こゝそ　有縁の地なるへきそ　終ホ
此塚ヲ　とゝまりしと也　其時の笈仏そ　今
當山の本尊と仰く　不動明王是也　予と雲
水ち頭陀なから　爰ホ杖を止め　仰き奉り
いとまの折く　藏経を讀誦し　大般若六百
軸ヲ細書し　法華経二十八品　一字一石ホ
書写し　又　昔　傳教大師　伊勢太神宮　日参の
節　太神口授の法花経　一萬枚ち切紙ホ書

し　此塚ゑ納　且　武蔵相模の境　えゝ乃坂下
今井村　金剛寺の先代　一百二十餘齢にし
て　一品親王ゑり　栢樹院　号を給ハられ
し寿山祐尊上人へ　予も折ふし　相見し　四
方山を語りしゆゑし　老僧のくまハく　其許
ハ　我らと同名なりとて　念頃ふかくられ
ゆゑふ　序ふ　いゝゑとゑるハ　我ら父ハ　下總　猿
嶋郡　蓮臺村の長　染屋氏の支族　江戸ふ住
居して　まうけらゑとしなり　かゝる由来を
思ふに　良弁大僧都ハ　深き有縁ふりとて
良弁塚の三字を書し給ひし　予　是を此塚
のえゝふしゑ致さて　普く結縁とゑなりふ
むと　石ふきさみて　建之
天保八　丁酉菊月　沙門壽山　謹識

※栢樹は白寿にかけている

※『ゑ』は『思』

5・解説

良弁・華厳宗第二祖。東大寺大仏造立に尽力し、初代別当となる。二歳の時、大鷲にさらわれ、東大寺境内の杉の枝に置かれていたのを通りかかった義淵が助けて養ったという良弁杉伝説がある。この『良弁塚』によると、ここ大相模不動坊を開山する。姪・国訓では「めい」で兄弟姉妹の娘。古くは「甥」の意にも用いた。寿山・・この碑を書いたお坊さん。西方福寿院墓地にある青面金剛の碑にもこの人の名が出てくる。なお当時の大聖寺の住職は、大聖寺境内にある天保九年の庚申塔の碑によると法印戒如である。祐尊上人・・今井村金剛寺の先代の住職で寿山祐尊上人とも言う。祐尊百二十一歳の時に碑の表面の『良辯塚』の字を書いた。

(2) 御手本講中

(大きさ) 高150cm 幅130cm 厚20cm

(表面)

御手本講中

七十一於霞翁書

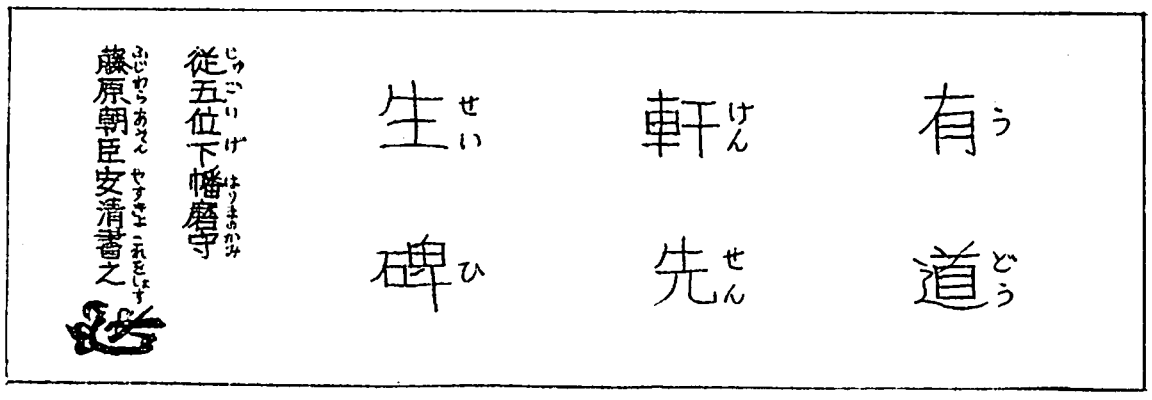
(裏面)

四十七人の名と世話人十二人の名 及び「石工 長兵衛」が刻まれている

(3) 中村有道軒の碑

(所在) 西方大聖寺境内　(大きさ) 高200cm 幅170cm 厚20cm

(表 面)



中村正光 丹書

竜

武州埼玉郡東方村土高日中村萬五郎政敏本姓平氏其先出于高望王家世邑長政敏列大保正許稱姓氏考諱政謙称七郎右衛門妣宇田氏天明四年甲辰十一月廿六日生自弟幼好擊劍從戸賀崎知道軒有称二先生學其術習練精熟年甫十八受初傳印可既而經歷諸州與有名劍士角逐其技率皆及者即劍客之来試術者亦皆逡巡避席而退研究益不置盡傳其蘊奥遂受極秘印可開場授徒弟子蓋一千餘人其得與傳者不下數十人先是有福井翁者祈信州飯綱之神自搭以劍術靡倒一世偶異夢有所開悟遂名其術曰神道無念流傳之戸賀崎氏戸賀崎氏病將没也恐傳法之或失其真盡擧秘訣授政敏曰吾兒尚幼今特付汝以有道軒之號以為教授門流之信汝其勉之或政敏固辭再三師不許於乎遂泣拜受焉從此人稱中村氏曰有道軒先生有青藍之稱先生為人孝順敦撲聲色玩好之物一無所容其治家儉而有法暇輙寫書自樂所著劍道口達一書門人皆謄寫以傳云萬延元年庚申正月罹疾百治無驗遂以閏三月廿六日終於家年七十七葬阿彌陀山先塋之次配嶋根氏生一男一女男七郎右衛門正迪嗣亦善劍法是為二世有道軒女適江戸長島氏銘曰　感是

誰謂劍一人敵　兵法源實在茲　一人學至千人　三軍可以驅馳

而況神道無念　神之變可度思　於戲乎有道軒　劍術宗兵法師

萬延元年龍集庚申夏月磐溪大槻清崇撰　梅巖福頼晋卿書　門人建

竜

秋岑澤蘭畫左右龍

石工 辻信義

中村有道軒の門の裏面

幹門

田代安兵衛義武
関根伊十郎重安
津田文蔵功忠
神田要蔵邦貞
津田政次郎功幸
逸見熊次郎福演
千代田兼松武輝
会田市太郎孝徳
関根与惣左衛門昭親
高島五兵衛邦泰
蓮見岩松義正

河野雪之助
芝崎源龍
城津豊左衛門
大川弥惣右衛門
八木清次郎
松井徳次郎
山崎市蔵
石小看次
関根知恵之輔
森田丑松
山崎勘蔵
小宮吉五郎
津田吉平
逸見玖次郎
関根与左衛門
栗原喜七
関山久蔵
秋田代安太郎
山吉太郎
横本源造
会田弥七
中村庄太郎
関根米蔵
同平次郎
木村猪兵衛
小久保虎蔵
島村新左衛門
細井伝次郎
会田源兵衛
高野幸次郎
浜野清太夫
横島敵八郎
岡野理左衛門
会田金平
荒木重左衛門
森田又左衛門
山崎浪吉
山上金兵衛
細野已之助
大沢兵馬
山崎万蔵
石井安五郎
原要人
関根富三郎
高橋恒吉

中村庄左衛門
小沢平太夫
鈴木有斎
中村万吉
鈴木徳次郎
蒔藤敬次郎
丹上重太郎
浅子東次郎
平野権左衛門
梁谷友五郎
塩田文次郎
同宇右衛門
瀬田文助
篠塚平八郎
上原権六
関根次郎兵衛
山口文蔵
古田市五郎
戸張嘉蔵
多々良雄次郎
秋山弥之吉
千代田平五郎
太田為蔵
鈴木次郎左衛門
山崎政右衛門
秋葉佐兵衛
内藤周助
小沢九一郎
戸張福太郎
豊田留五郎
秋山吉十郎
加藤隆助
新井孝蔵
青木熊蔵
豊田仙次郎
鈴木鳳蔵
中村義三郎
服部泰輔
高橋柳太郎
金子鼎次郎

田中利十郎
江村長左衛門
同暦蔵
岡田弥惣左衛門
同和吉
飯島金之丞
秋山忠
山崎直蔵
川尻由蔵
竹内五郎
松井礼吉
永野駒太郎
同儀三郎
遠藤喜三郎
中村三五郎
小林嘉内
高崎造酒三
萌万石工門
鈴木正九郎
山田保吉郎
萌龍之助
白鳥忠次郎
矢島忠三郎
浅井惣吉
戸張吉蔵
大貫万蔵
八木橋慶蔵
同清左衛門
木原喜十郎
堀井藤右衛門
富山清右衛門
小島武兵衛
角田玄泰
小川久五郎
川鍋新七郎
増田豊三郎
中田忠左衛門
大作大八
石島伝蔵
甲田三郎兵衛
鈴木真次郎
鈴木春吉
下田伝之助
永野半四郎
高崎松吉
永本長左衛門
飯嶋佐平次
岡野市左衛門

(4) 斉藤先生の碑（所在）西方大聖寺境内（大きさ）高200cm 幅170cm 厚20cm

（表面）

齊藤先生之碑

先生名徳幼名利輔晩號大田齊是邑之人考稱林之助妣關根氏文化十一年甲戌五月五日誕有三男二女先生総角好學工書兼和歌又精理化學初仕万年氏執采邑之事勤勉竭誠用心于治水之事大得民心万年氏賞之授以姓氏明治維新之際致仕閑居江北優游文墨以書課業子弟就學者一百有餘名明治十五年十月二日卒年六十有九子弟輩傷悼相謀建碑欲遺芳名於後世云　明治十六年五月二日建之

言

將澤永戸思孝撰并書

撰并

不負言ちる毛面奈
老者摯度一葉二の萬

徳行

先生の名は徳行　幼名は利輔　晩号は太田斉　是邑之人　考は林之助
と称し　妣は関根氏　文化十一年甲戌五月五日誕る　三男二女有り
先生は総角より学を好む　書は工み　和歌を兼ねる　又理化学に精しい　初め万年氏
に仕え　采邑之事を執る　治水之事に誠を竭し心を用いて勤勉し大い
に民心を得る　万年氏は之を賞め　以て姓氏を授く　明治維新之際
致仕し江北に閑居す　文墨に優游し　書を以て子弟に課業す　就学者
は一百有余名　明治十五年十月二日卒る　年六十有九　子弟　輩　傷
悼し　相謀りて後世に芳名を竭さんと欲し建碑すと言う

総　角……あげまき、またその形の髪をした幼者。転じて幼時。
理化学……物理と化学。
万年氏……西方村内にあった知行所（旗本が治める領地）を
治めていた武士。旗本である。
采　邑……旗本のおさめる知行所。
致　仕……官職を辞して隠居すること。
文　墨……詩文を作り或いは書画をかくこと。
優　游……暇があってのんびりしているさま。

（裏　面）

発起幹事見田方高崎宜治以下七十八名を刻む

彫工松伏伊藤平蔵

(横)(縦)　区画寸法　(大きさ)　幅 96cm　縦 150cm　厚 30cm

碑銘修門惣

大積善徳行の基礎朽る事あらんや　爰に当寺廿三世の住木食戒圓師二王門
亦き八法に非と発願し　十方の信者に助成を得て文化元年十二月始て瓦葺の大
惣門建立し　後ち嘉永元歳に至り経る事四拾九年に至して大破を　時に三十世の
信剛比丘広く有志を受再興し　屋根及銅版に葺換を　永世不朽の恩の外
明治十三年に及て僅に三拾余年に至して損破す　修補成り難し　西方　東方
見田方三村の信徒同盟五十余名一致相議し　懇篤世話方に尽力す　八方
有信の浄財を納得し　明治十七年に至り修繕銅板葺落成を　宜ふる哉是即ち
本尊明王の威徳と衆庶の功徳と利益感応して成就する所謂なり　因て衆
有志に報る五穀成満家内安全子孫繁昌の祈念怠る事なし　其功勲を
碣に勒して後覧の為に備へ爾云

明治二十一年四月

当寺三十二世住真島戒信謹誌

（惣門修繕碑の裏面）上　部

寄附者244名と
修繕世話係56名と
大工5名と
真島戒信（当寺三十二世）・会田永保（安養院）・
東方村観音寺・当村福寿院・上砂持集金
が刻まれ、　また　それぞれの
上部には　寄附の金額と刻まれている
石工は　草加の青木宗次

名　附　寄

一金三円　南埼玉郡伊奈村　深井七郎兵工
一金五円　登戸村　関根八右工門
一金四円　浜野富右工門
一金三円　仝　時蔵
一金三円　関根喜左工門
一金三円　森田園五郎
一金三円　岩瀬佐右工門
一金三円　駒崎　又七
一金三円　谷塚村　中村喜太郎
一金拾円　五反田村　藤田善兵工
一金三円　中村信太郎
一金三円　秋山政太郎
一金三円　松木村　金子秋太郎
一金五円　豊田文治郎
一金五円　南百村　中村七郎兵工
一金三円　蒲生村　豊田久治郎
一金拾円　中野弥三郎
一金五円　神谷道之助
一金五円　清村清十郎
一金三円　中野浅右工門
一金三円　大熊安右工門
金三円　蒲生村　大熊喜左工門
仝三円　中野宗庵
仝三円　中野七郎左工門　四条村
仝拾円　飯島みゝ　ミヽ＝ね
仝三円　上尾宿　前五郎
仝三円　南高柳村　藤波伝左工門
仝五円　大曽根村　豊田伝五右工門
仝三円　長山村　細沼銘十郎
仝五円　道林村　榎本　熊
仝五円　鈴木次兵工
仝三円　滝田又右工門
仝三円　百木平右工門
仝三円　仝　平八郎
仝拾円　宮林村　森田新兵工
仝三円　平林恒蔵
仝三円　大町タイハタケ　高橋庄吉
仝三円　須賀恵兵工
仝三円　尾ケ井長七
仝三円　金町サヤウ台　加藤弥三郎
仝五円　東宮林村　江原保之進
仝三円　山口紋蔵
仝五円　岡畑村　鈴木初右工門
仝四円　大貫万吉
仝三円　鈴木八郎兵工
仝三円　浜笠源五郎
仝三円　北川崎村　長野半右工門
仝三円　大善寺伊兵工
仝三円　鈴木作左工門
金三円　弥十郎村　黒田慶太郎
仝拾円　大谷村　長坂恒兵工
仝五円　大宮村　深井恒三郎
仝三円　原　慶三郎
仝三円　鈴木治右工門
仝五円　上尾宿　吉岡太左工門
仝三円　池沢勝蔵
仝三円　吉岡太蔵
仝三円　下尾久村　高橋八蔵
仝三円　平　仙右工門
仝拾五円　黒谷村　浜野甚四郎
仝三円　飯塚村　吉田楳之丞
仝三円　ヨコヤ村　吉田楳之丞
仝五円　七左衛門村　松沢藤之助
仝三円五銭　大塚源左工門
仝三円　桜井富右工門
仝三円　増田文右工門
仝三円　野口八郎左工門
仝三円　井出庸造
仝三円　川上林右工門
仝三円　秋山孝太郎
仝拾円　谷中村　関根宇一郎
仝五円　貫次郎
仝三円　川津宗吉
仝三円　中村米蔵
仝三円　堀江豊吉
仝三円　仝　惣吉
仝五円　中村賢之輔
仝三円　仝　五郎左工門
仝三円　神明下村　田村武平次
仝三円　恩間村　渡辺吉輔
仝拾円　北島郡松伏村　石川恩蔵
仝五円　仝　大川戸村　宇右工門
仝四円　坂巻由之
仝三円　島村藤八
仝五円　森田政之助
仝三円　新井倉之助
仝三円　浅井勘蔵
仝四円　山下銀蔵
仝四円　仝　亀右工門
仝三円　石川治左工門
金三円　横川長兵工
仝五円　鈴木　藤助
仝三円　仝　伊三郎
仝三円　山崎春左工門
仝三円　田中恒固
仝五円　赤岩村　細野己之助
仝三円　山崎又治郎
仝三円　仝　友七郎
仝拾円　上川村　蒔田義三郎
仝八円　岡田徹郎
仝三円　仝　簾治
仝三円　豊田市松
仝五円　井上源兵工
仝三円　岡野慶太郎
仝拾円　平沼村　高鹿新八
仝五円　田中長蔵
仝五円　小林村　互　平蔵
仝三円　仝　弥左工門
仝三円　土塩村　藤波治助
仝三円　ホウリン　柴田郡次
仝三円　大沢清次郎
仝三円　仝　春吉
仝三円　ミヅノ村　宇野与八
仝三円　大沢次郎兵工
仝三円　川口村　増田平兵工
仝五円五銭　吉谷村　沢谷五郎兵工
仝三円　冠山伊右工門
仝三円　会田村　関根宇右工門
仝五円　東カシカ郡北村　伊藤惣兵工
仝三円　豊島　友七
仝五円　大畔村　山本市太郎
仝三円　小屋村　大作巳之助
仝三円　中島新田　岩井八郎
仝拾円　金杉村　飯島常五郎
仝七円　北足立郡八潮村　鈴木長太郎
仝五円　関根徳右工門
仝五円　森田政之助
仝三円　新井倉之助
仝三円　浅井勘蔵
仝四円　山下銀蔵
仝四円　仝　亀右工門
仝三円　石川治左工門
金五円　仝右工門　留吉
仝三円　駒崎八郎右工門
仝三円　田中伊助
仝三円　仝　梅次郎　梅＝楳
仝三円　山崎春左工門
仝三円　田中恒固
仝三円　仝　半七　松＝ハ
仝三円　早船貞治郎　船＝ハ
仝三円　梁谷村　井上彦次郎
仝三円　三枝宗右工門
仝三円　北足立郡宮原村　守富園右工門
仝拾円　埼玉郡　秋元典幸
仝拾円　南足立郡　須賀戸右工門
仝三円　北足立郡　井上清治郎
仝三円　仝　大川戸宿　越谷治右工門
仝五円　石塚勝五郎
仝三円　会田米吉
仝三円　仝本石町　大野伝平次
仝三円　山田茂兵工
仝三円　行トクカイ村　ヨコヤ欠郡
仝三円五銭　天京　飯塚郡　与兵工
仝五円　仝　吉沢与兵工　ヒ＝と　ホ＝こ
仝五円　天京　横尾　太吉
仝四円　支田町　村田浮良
仝三円　牛込ハシリ町　荒井周太郎
仝三円　沢渡　中村源太郎
仝三円五銭　当間見郡村　横川勘治郎
仝三円五銭　荒井重兵工
仝三円五銭　高崎沢次郎
仝三円五銭　中村為吉
仝三円　谷塚源治郎
仝三円　仝　金七
仝三円　仝　吉兵工
仝三円　仝　長七
仝三円　植竹熊蔵
仝三円　仝　留吉　留＝畱
仝五円　仝東カシカ　秋谷磯兵工
仝五円　関根平蔵　根＝禰
仝五円　谷塚惣次郎
仝五円　中村栄次郎

（惣門修繕碑の裏面）

下　部

金五円　当所東方村　佐藤伝八
金五円　宇田園次郎
金五円　中村亦蔵
金四円　石垣健次郎
金四円　高島熊蔵
金四円　中村三蔵
金四円　荒井新蔵
金四円　三本松次郎
金四円　中村三次郎
金四円　荒井関之助
金四円　大熊武右衛門
金四円　林甚之助
金四円　平林佳助
金四円　松井滝蔵
金三円　染谷金左衛門
金三円　宇田園三郎
金三円　高橋伝助
金三円　石垣万蔵
金三円　中村元次郎
金三円　山崎幸八
金三円　宇田初五郎
金三円　宇田ゆみ
金三円　石塚岩蔵
金三円　当所西方村　石塚ゆくみ
金拾三円　深井茂吉
金拾円　斎藤長左衛門
金拾円　宇田甚蔵
金拾円　宇田七蔵
金七円　須賀平内
金七円　田村庄蔵
金六円　荒井作蔵
金六円　野口嘉左衛門
金五円　石塚国五郎
金五円　浜野縫吉
金五円　野口とく
金五円　斉藤助左衛門
金五円　宇田春吉

金五円　当所西方村　荒井嘉兵工
金五円　深井まつ（つゝみ）
金四円　薄谷弥右衛門
金四円　浅見市三郎
金四円　浜野七郎右衛門
金四円　野口伊右衛門
金四円　石塚長五郎
金三円　野口喜兵工
金三円　浅見名右衛門
金三円　金子直次郎
金三円　石塚五郎七
金三円　竹次郎
金三円　六左衛門
金三円　中村佐市
金三円　斎藤佐左衛門
金三円　山崎庄吉
金三円　進藤角太郎
金三円　新井定五郎
金三円　田村半次郎
金三円　石塚嘉蔵
金三円　斉藤斧右衛門
金三円　喜助
金三円　林芳太郎
金三円　石塚安兵工
金三円　石垣伊右衛門
金三円　多田音次郎
金拾五円　横川伝左衛門
金拾五円　田代安太郎
金拾円　山崎常三郎
金拾円　林久太郎
金拾円　吉太郎
金五円　深井斉蔵
金五円　石垣源七
金五円　秋元清四郎
金三円　秋山寿請
金百円　東京神田栗物町　黒崎仙太郎

金百五拾円　当所三十三世　真島成信
金拾五円　安養院　会田永保
金拾五円　東方村観音寺
金八円　当村福寿院
金百円　土部時集金

修繕世話懸

金拾五円　見附方　宇田幾之助
金拾円　関根松次郎
金七円　中村寅吉
金拾五円　谷塚五郎左衛門
金八円　横川平左衛門
金六円　宇田宗吉
金六円　完倉伊之助
金六円　馬之助
金六円　植竹孝吉
金五円　浅見銀蔵
金五円　宇田茂七
金五円　横川彦兵工
金五円　宇田寅吉
金五円　高崎新左衛門
金五円　宇田亀次郎
金五円　関根半三郎
金四円　谷塚角松
金三拾円　東方村　中村七郎右衛門
金拾円　治太郎
金拾円　助右衛門
金八円　中村佐吉
金七円　浅見勝太郎
金六円　染谷房五郎
金六円　高崎伊十郎
金六円　高橋甚蔵
金七円　脇田庄右衛門
金六円　谷塚長五郎
金五円　浅見卯之助
金五円　鈴木新六

金拾円　東方村　平林惣次郎
金拾円　中村俊太郎
金九円　脇田不曽右衛門
金七円　大塚新右衛門
金七円　高島園吉
金拾円　平林直次郎
金六円　高崎伝内
金六円　助勝五郎
金五円　藤波喜三郎
金五円　石垣斎兵工
金五円　荒井浅蔵
金四拾円　西方村　秋山吉重郎
金三拾円　秋山弥之吉
金六拾円　斉藤孫兵工
金三拾円　山田平三郎
金三拾円　鈴木仁左衛門
金拾円　斉藤七郎兵工
金拾五円　山崎新左衛門
金三拾円　斉藤敬次郎
金拾五円　小沢惣太郎
金拾三円　斉藤岩蔵
金拾八円　篠田保太郎
金拾五円　池ノ谷丑太郎
金三拾円　石塚六郎左衛門
金拾三円　秋山六郎左衛門
金拾五円　深井仁左衛門
金拾円　石塚半次郎
金五円　浜野頼江

金拾五円　大工　西方　大熊伝兵工
ミ　櫛川藤三郎
ヒ　宇田和吉
コ　中村孝吉
カ　井上市兵工

草加　石工　宗次

(6) 護摩木山講の碑

(所在地) 西方大聖寺境内

(大きさ) 向かって右　高183cm　幅95cm　厚10cm

中　高267cm　幅190cm　厚10cm

向かって左　高189cm　幅90cm　厚10cm

(高さは台座から)

(向かって左の碑の表面左端)

我真大山乃本尊ハ往昔天平勝寶二年人皇四十七代
孝謙天皇ノ勅旨ヲ奉シ良辨僧正相模國大山ヨ登リ給ヒ俗称行の暁不動明王ノ尊容ヲ雨降木ニ現シ玉ふ玆拜シ其地
以テ一刀三礼の尊容ヲ彫刻シ奉リ笈ヲ負ヒ諸國ヲ巡化シ當所ヲ過玉ふ杖ヲ止メ其友ヲ宋テ一歩ト進むこと能ハざるに
依リテ此處ヲ有縁ノ地ト定メ堂宇ヲ營みて安置シ玉へるなり地名玆大相模ト唱ヘ山号ヲ真大山ト称せるハ本尊安置の
由緒ヲ係るとのまし元亀天正ノ頃公武大ニ敬信シ徳川將軍家康公信仰殊ニ厚く朱印及宝物寄附もて三壇三時水
祈願所ト為ス給へり然るに星霜移リテ旧観ヲ失ひ既ニ往時ヲ追懐せしむるに忍れり是を以て去る明治十四年二月十八日
宮詣ヲ設て護摩炉明諸ヲ結成をしに資金数千ヲ投ずるホヨリ今護摩木苗植附乃敷地八畝七拾五坪ヲ購求し奇附せ伝に
ゐたれわ仍テ其講社有志ノ誠意ヲ表せんが為各自ノ姓名ヲ彫刻し堂前ニ建設して永世記念の為ニ云ふ

明治廿六年五月　真大山三十三世現住　沙門龍善欽誌

（横書）

互　任　連

晴々と　産聲あげて　梅の花

ゆあみして　すみ男と　成にけり

名月や　いつもの儘の　人の影

つらなりて　共に明るし　雪の山

手をうてハ　あいと答つ　水の音

梅魚

水幸

喜好

市山

三花

篆額　獲一　書

（横書）

N 獲 西 新 井 国 ＩＴ 川 京 書

(8) 征清軍凱戦記念碑

(大きさ) 高さ230cm 幅95cm 厚14cm

(表面)

征清軍凱戦記念碑

草加石工
青木宗次鐫

(裏面)

表書

陸軍少将福島安正君書

従軍兵員 (ここに計15名の名が刻まれている)

武蔵国南埼玉郡大相模村 徴兵慰労義会々員 建之

(9) 御座の松の歌碑

(所在) 西方大聖寺境内　(大きさ) 高160cm　幅80cm　厚20cm

(表面)

御座の松　隆圓

とこしへに
永遠
国をまもらむ
もらせ
ちかひをは
誓
(遵)
そ

たゝひと
少
もとの
もと
乃
松に
う
のこして

(裏面)

寄信芳名

草加町　山川仁兵衛
出羽村　荒井吉右衛門
同　倉田清太郎
東京麹町区飯田町字富
同日本橋区本石町　逸見元一郎
同区深川区江町二丁目　福井市之助
越ケ谷町　同　鎌太郎
大澤町　山田茂兵衛
福井樓右衛門
同　松陰
発起人　同　順子
七十二才
石工　草加町　青木京次

真大山中興第一世高岡隆圓師之歌

明治三十六年七月建焉

碑の文（一）

（松平）

此松は　延慶二年の昔　今の地に　遷佛の時　その御座を常之にと　うゑしものなるに
よりて　名をば　しかいふなり　星移り　ものかはりて　太田資正北條氏繁などしば〳〵
遊覧せられ　又徳川家康公も深く愛し給ひて　遂に御朱印をつけ給ふに至る
降て明治二十八年七月　大火にあひしかその烟に藪れなからその一葉おも損せず　ひと
みなふしきの思ひをなし　俗に火除の松ともよへり　こたひ斎藤規矩郎居士　發
起となりて　この為に何くれとなく　力を尽して至らさるなし　願くは此功徳を以て　あ
まねく四恩に及ほし　自他倶に十善を行し　佛の拡願をして　もれなからしめんことを
みほとけの　ともにしあれは　御座の松　佛法僧もきて　やすむ覧　隆圓

（回覧）

松栄講　東京繊日商

御座之松

永代修繕連名

真大山中興第一世隆円大阿闍梨耶

明治三十七年八月建焉

（四枚目）

日京　松尾清吉
堀川仙太郎
松宮金三郎　下谷
渡辺仙吉
古市弥太郎

芝
原　已之吉
原　美代松
平井伊太郎
西田平七
小野田徳次郎

浅草帳　元
世話人
森田金太郎
花又　松岡次良吉
今村元次郎
猪子為次郎

西神田帳　元　下谷
世話人
山本由太郎
植田鎌五郎
古賀金三郎
仲谷米造
角谷保太郎
伊藤宗太郎
浅井孝二
矢部栄太郎
鈴木重吉

布施童三
杉本幸吉
勝本新五郎
箕輪幸次郎
平井常三郎
杉本スヾ

江川滝太郎　世話人
鬼丸宗一郎
内藤梅吉
西脇広吉
田尾茂次郎
岩田音吉
増田伊佐吉
西川柴太郎
池上定次郎
平野常次郎
六波羅房吉

大野与吉
山田為次郎
池田林蔵
宇城作次郎

正木信太郎
豊倉六太郎
勝田佐太郎
荒井辰五郎
樋口久吉

発起人
下谷坂町
斎藤規矩郎　鍛冶職
中津勝次郎　楢木藏
島村元次郎

石工　草加町
青木宗次

相原角次郎
中川鉄蔵
鈴木良助
永田友吉
冨山竹次郎
村松徳次
細野力造
清水徳太郎
保岡建重
矢崎近次郎

(11) 日露戦役記念碑

(大きさ) 高320cm 幅110cm 厚12cm

(表面)

日露戦役記念碑

(裏面)

帝国軍人後援会

明治三十九年十一月

埼玉県南埼玉郡大相模村徴兵慰労義会建設

(68人の名が刻まれている)

(12) 降魔松

(大きさ) 高85cm 幅45cm 厚20cm

(表面)

降魔松

(向かって左側面)

寄附者 草加町 青木宗次

明治四十年九月

(14) 誠忠碑

(大きさ) 高320cm 幅120cm 厚23cm

(表面)

誠忠碑

参議院議員 上原正吉謹書

昭和六年九月十八日 満州事変 昭和十二年七月七日支那事変

昭和四十二年三月建

(裏面)

昭和十六年十二月八日 大東亜戦争 昭和二十年八月十五日終戦

戦没者 (106名刻む)

応召者 (263名刻む)

委員長 池谷与一郎

副委員長 (2名刻む)

委員 (28名刻む)

特別賛助者 (19名刻む)

中野春吉謹書

(13) 日露戦役記念之梅の歌碑

(所在) 西方大聖寺境内　(大きさ) 高110cm　幅70cm　厚23cm

(表面)

千代梅　従一位藤原實愛　九十四歳

かきりなき　春を重ねて
匂ふらむ　八千代の梅の
高きかをりは

(裏面)

日露戦役紀念之梅

従一位勲一等　嵯峨實愛公詠書　九十四歳

東京府下向嶋寺島

寄附人　松本常太郎氏
仝妻　キク子

明治四十二年一月新建　眞大山
草加町
四代　青木宗義彫

(15) 鶏魂碑

(所在地) 西方大聖寺境内　(大きさ) 縦92cm　幅184cm　厚13cm

(表面)　鶏魂碑

(裏面)　越谷養鶏の沿革

埼玉県の東部　沖積地に位置する越谷は　元荒川　綾瀬川　古利根川が流れ水郷の地として知られる　当地に人びとの生活が展開されたのは　見田方遺跡の発掘により　古墳後期から古代にかけてと推定されており　天平勝宝三年(七三〇)の創立を伝える大相模不動尊をはじめ　野島の地蔵尊や　越谷の久伊豆神社など悠久一千年の歴史を伝える多くの旧跡があり　これらを中心に集落が形成されてきた　江戸時代は水稲を中心とした穀倉地帯として　大きな役割を果たしてきたが　また交通の要衝として　日光道中越谷宿が取り立てられ　かつ六斉市により商圏の中心として栄えた　近代に入り　農業は畜産や工業などを取り入れ　多角的な経営に移行していった　このなかで養鶏は大正期から数人の先覚者により経営されるようになったが　当時は全く初歩の段階であり　すべてが手探りの状態であった　当初は平飼で　母鶏孵化により雛を育成したが　その後　優良雛の導入や飼育方法の改良がはかられさらに　昭和の時代に入ると土地の効率化や管理の簡素化をはかる必要から集約養鶏が考えられ　昭和十年にわが国で初めて鶏舎を立体化した三段式バタリー方式による飼育方法が考案された　その後　戦中の飼料不足で　一時衰退したが　戦後急速に進展をみて昭和四十三年には飼養戸数五〇〇戸飼育羽数は一〇〇万羽にも達し　その販売額は米作を上回る販売額となった　こうしてバタリー方式による養鶏の発祥の地として　また集約立体養鶏においては他に類をみない規模となった　このため　全国各地から視察に訪れる者　跡を絶たず　越谷養鶏方式が全国に普及した　これがしいては現在のケージ養鶏の基を開い

越谷市長　鳥海市郎　謹書

たものであり　わが国養鶏産業に与えた功績は　計り知れないものがある
今やわが国の養鶏産業は　アメリカに次ぐ世界第二の生産高を誇り　国民の健康
増進に大きな役割りを果たし　民族永遠の繁栄に貢献できるのもここの先賢者
たちの血と汗の結晶であり　その功績を高く顕彰するものである。
ここに養鶏を業とする者及びこれに関係する多くの業者相集い　人類生存のため
その生を全うせず生命を断った多くの鶏群霊に対し　その霊をなぐさめるとともに
越谷の地がわが国集約立体養鶏の発祥の地であることの由来を記し　永く後世に
伝えんとするものである

昭和五十八年九月二十八日　建之

越谷市養鶏協会々長　森屋英龍　撰文

鶏魂碑　建立　奉賛者名

越谷市養鶏協会
会長　森屋英龍
副会長　堅口年五郎
全　岡安忠蔵
理事　島田三之一
全　尾川信
全　石井直吉
全　大塚重男
全　鈴木隆一
全　平野寿久
全　石塚義一
全　石長五郎
全　浅子栄治
全　岡安徳之助
全　森田義雄
会計　石井昭
全　辻武彦
監事　峰岸明
全　石井義明
須賀友五郎
宮川忠志
石井正男
須賀又市
須賀吉太郎
宮川章一
宮川恵
柳忠義
齊藤亀之輔
横辻敏一郎
山川雅美
江崎武夫
名倉好太郎
秋谷徳太郎
小川賀一
小川賀夫
須賀貿一
須田俊武
会計岩一
小川伸夫
須賀太郎蔵

越谷地区食鳥肉組合
組合長(有)鳥正　小山博
副組合長　野口吾代三郎
理事　梁谷昇
全　鳥昇商店
全　小沢澄食鳥
会計(有)浜野食鳥
(株)高島屋本店
(有)鳥清
(有)秋山商店
大内食鳥店
鳥安商店
鳥忠商店
野口商店
深井正男
(有)半戸秋
鈴入木沢商店

飼料鶏卵会社
大洋飼料
豊橋飼料
日本農産工業
伊藤忠飼料
中部飼料
鈴木商店
須賀商店
大野商店
山一飼料
松井産業
石川商店
須賀文蔵
鈴木卯之吉
奇玉鶏卵センター
伊勢長商店
武田薬品
力ドヤ
稲垣太陽堂薬品
中里薬局
陽田商事
日化生
協和化工
大畑化場
八イデ才化場
後藤鶏卵場
藤部養鶏園
日本若めす農場
森尻鶏化場

真大山大聖寺
第四拾世　弘道　謹書